

# 大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校プール建設工事に伴う

大垣外遺跡第2次緊急発掘調査報告書

1993年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

# 大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校プール建設工事に伴う

大垣外遺跡第2次緊急発掘調査報告書

1993年

長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

## 序

箕輪町教育委員会  
教育長 堀 口 泉

大垣外遺跡は、南小河内区のほぼ中央部、沢川の北側に広がる扇状地上にあります。ここは、以前から多くの遺物を探取できるところとして知られており、町の重要な遺跡の1つであります。同遺跡内にある箕輪東小学校は、平成5年度には創立120周年を迎え、昭和45年からは校舎の建て替えを、また平成元年には体育館の全面改築を行ってきました。今回、プールの老朽化に伴って移転新設をする事になりました。調査は3月初旬より4月初旬まで約1ヶ月にわたって行われ、縄文時代の遺構遺物が出土しました。また、遺跡見学が行なわれ小学生の身近な教材として学習に役立ったものと思われます。

調査結果につきましては、本書の中で詳細に記しておりますので、今後多くの方々に広く活用されて、郷土の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

未筆になりましたが、今回の調査に際し深いご協力とご理解をいただきました学校関係者、並びに寒さの中、調査に直接従事してくださりました発掘調査団員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3893-1番地他に所在する大垣外（おおがいと）遺跡の第2次緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。調査は、平成4年3月2日から4月9日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
  - ・土器の復元－福沢幸一
  - ・石器の石質鑑定－樋口彦雄
  - ・遺構図の整理・トレース－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・遺物の実測・トレース－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・土器拓影－根橋とし子
  - ・挿図作成－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
  - ・写真撮影・図版作成－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。  
住居址－1：40、1：60　　土坑・小竪穴－1：40
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。  
縄文土器－1：2、1：4、土製品－2：3、縄文土器拓影図－1：3、石器－2：3、1：3、1：4
6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。
7. 本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子が分担した。
8. 本書の編集は、赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子が行った。
9. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

# 本文目次

題　字

団長 横口彦雄

序

教育長 堀口泉

例　言

本文目次

挿図目次

表　目　次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の立地.....	1
第1節 位 置.....	1
第2節 自然環境.....	2
第3節 歴史環境.....	3
第Ⅱ章 調査の経過.....	5
第1節 調査に至る経過.....	5
第2節 調査団の編成.....	5
第3節 調査日誌.....	6
第Ⅲ章 遺跡の状態.....	9
第1節 調査方法と結果概要.....	9
第2節 層 序.....	9
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	13
第1節 住居址.....	13
第2節 小堅穴・土坑.....	25
第Ⅴ章 ま　と　め.....	30

## 挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査区設定図	8
第4図 土層図	10
第5図 全体図	11・12
第6図 1号住居址出土土偶実測図	14
第7図 1号住居址出土土器実測図1	14
第8図 1号住居址実測図・遺物出土状況図	15・16
第9図 1号住居址出土土器実測図2	17
第10図 1号住居址出土土器実測図3	18
第11図 1号住居址出土土器拓影図1	18
第12図 1号住居址出土土器拓影図2	19
第13図 1号住居址出土石器実測図1	20
第14図 1号住居址出土石器実測図2	21
第15図 1号住居址出土石器実測図3	22
第16図 小豎穴・土坑実測図	26
第17図 土坑実測図	27
第18図 土坑出土遺物実測図・拓影図	28

## 表目次

第1表 周辺遺跡の一覧表	3
第2表 1号住居址出土土器観察表	23
第3表 1号住居址出土石器観察表	24
第4表 小豎穴一覧表	27
第5表 土坑一覧表	29
第6表 土坑出土土器観察表	29
第7表 土坑出土石器観察表	29

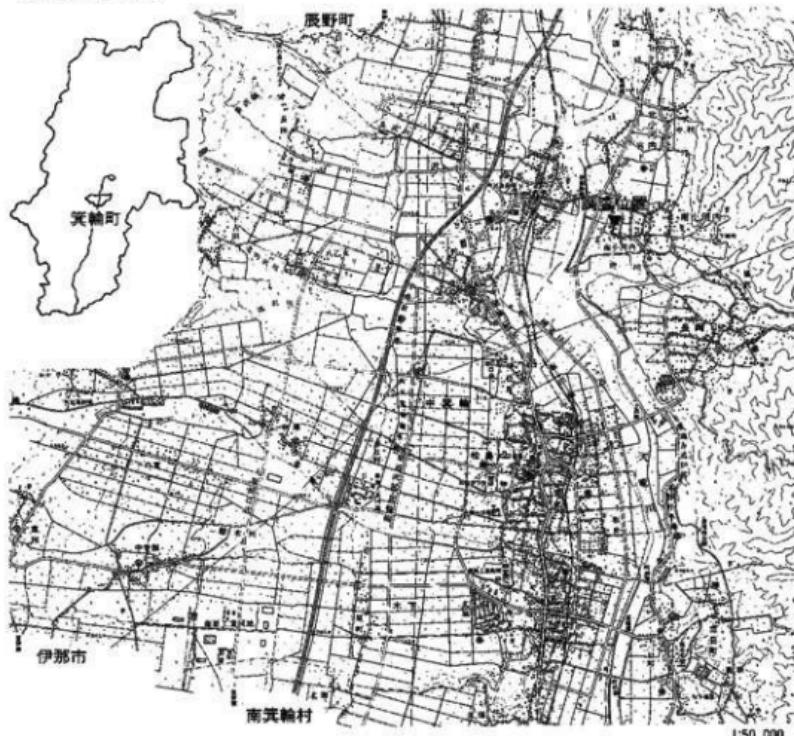
## 図版目次

- 図版1 調査地近景、調査地全景
- 図版2 土層断面、1号住居址
- 図版3 1号住居址遺物出土状況全景、1号住居址土偶出土状況
- 図版4 1号住居址遺物出土状況
- 図版5 1号土坑、2号土坑、3号土坑
- 図版6 4号土坑、7号土坑、8号土坑
- 図版7 10号土坑、1号小竪穴、2号小竪穴
- 図版8 3号小竪穴、4号小竪穴、調査風景
- 図版9 出土土器1
- 図版10 出土土器2
- 図版11 出土土器3、出土土器4
- 図版12 出土土器5、出土土器6
- 図版13 出土石器1、出土石器2、出土石器3
- 図版14 出土石器4
- 図版15 出土石器5、調査参加者

# 第Ⅰ章 遺跡の立地

## 第1節 位 置

大垣外遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪3893-1番地他、北緯 $35^{\circ}55'48''$ 、東経 $137^{\circ}59'43''$ の地点で標高約710mの箕輪東小学校の敷地内に位置する。天竜川左岸段丘上の南小河内区は、東方の山麓から流れる沢川によって形成された扇状地である。遺跡地は、南小河内区の南方部に位置し、また扇状地のほぼ末端部にある。ここは、眺望もよく南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の沢区、大出区が展望できる。天竜川との比高差は約15mを計る。



第1図 位 置 図

## 第2節 自然環境

箕輪町は、西に木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の東方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。その両岸は河岸段丘と数多い扇状地とが独特の地形を作り出している。東方の山麓から流れる沢川によって形成される扇状地は川を挟んで長岡区と南小河内区に分かれる。扇状地における地質構造はローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂層で構成されている。天竜川はその扇端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を造り上げている。段丘の突端部は天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい緩やかな傾斜地である。段丘下には扇顶部や扇尖部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利とあわせ、豊かな水源に恵まれている。

遺跡は、この扇状地の沢川を挟んだ北側突端部に立地する。上記の通りの恵まれた水源はもとより、西へ緩やかに傾く傾斜面は日当たりもよく、また東方にひかる山林は、特に縄文時代の食糧源となるドングリ等の採集、獣の狩猟の場として最適だったであろう。このように恵まれた自然環境の中に大垣外遺跡は存在するといえよう。



上空より遺跡を望む

1:8,000

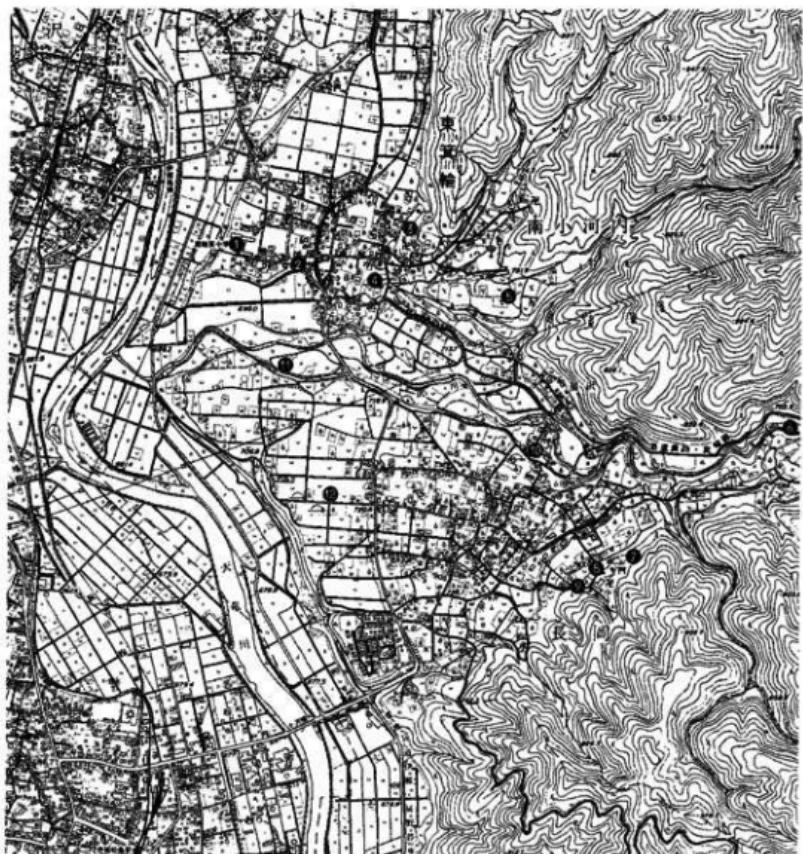
### 第3節 歴史環境

天竜川左岸段丘上一帯は竜東地区と呼ばれ、ここには長岡区、南小河内区が東部の一単位として存在している。地形は天竜川沿岸水田地帯から小段丘や扇状地を経て伊那丘陵になっている。この竜東地区の遺跡の分布状況は、沢川の河岸段丘上にみられる遺跡(1、2、4、11)と、山裾に広がる遺跡(3、5~10、12)とに分けられる。大垣外遺跡は、前者の代表的な遺跡と言える。後者の遺跡の多くは長岡区にあり、ここは昔から土地が肥沃であるため人々の生活の舞台であった。また、以前は30基前後の古墳が存在していたが、現在では10基ほどが確認できるのみである。沢川を隔てた南小河内地籍の舌状台地上に、上の平城跡(遺跡)がある。

これらの遺跡を保護していく上でも、今後この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があると言える。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中・近	
1	大垣外	南小河内	扇央		○	○	○	○		平成元年第一次 発掘調査
2	殿屋敷	南小河内	扇央		○					
3	普済寺	南小河内	台地		○				○	昭和63年発掘調査
4	日向前	南小河内	扇央		○					
5	上の平	南小河内	台地	○	○				○	昭和44年県史跡指定
6	一之沢	長岡	山麓		○			○		昭和62年発掘調査
7	源波古墳	長岡	扇頂				○			昭和62年発掘調査
8	源波	長岡	扇頂		○			○		昭和62年発掘調査
9	角道	長岡	扇央		○					
10	角畠古墳	長岡	扇央				○			
11	古神	長岡	扇央		○	○			○	平成2年発掘調査
12	羽場の森古墳 1~3号	長岡	段丘				○			



- ① 大塙外
- ② 日向 前
- ③ 源波古墳
- ④ 角畠古墳
- ⑤ 羽場の森古墳1~3号

- 駿上屋の
- 上源古
- 平波神

- 普济之
- 一角
- 寺沢道

1 : 20,000

第2図 周辺遺跡分布図

## 第II章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経過

箕輪町立箕輪東小学校は、明治5年開校以来、平成5年度で120周年を迎える。この長い歴史を誇る本校は、その敷地一帯に埋蔵される大垣外遺跡と共に更に新しい歴史を歩み続けている。本遺跡は、沢川の押し出しによって形成された扇状地上に数多くみられる遺跡の一つであり、その範囲はやや不明確であるが、平成元年度に行われた体育館改築に伴う第1次調査によって縄文時代中期初頭を中心とする平安時代にまで及ぶ複合遺跡であることが判明した。また、あくまでも体育館改築というごく限られた調査範囲ということもあったが、埋蔵されている遺構・遺物の広がりが現校舎のある東側に向かってより密になると推測できる。このような調査の経過も踏まえ、今回体育館の南側に隣接する菜園を中心とした一帯約1,000m<sup>2</sup>を用地として、同校のプールを新規に建設するに当たり、町教育委員会内における保護協議を重ねた結果、第2次調査を実施して記録保存を行うことになった。

調査は、工期との関係を考慮し、できるだけ早急に対応せざるを得ないということもあって、平成3年度から4年度への継続事業として、平成4年3月2日から4月9日までを調査期間とし、町教育委員会が新たに調査団を結成して調査を実施する運びとなった。

### 第2節 調査団の編成

#### 調査団

団長 横口 彦雄

調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢 幸一 長野県考古学会員

調査員 横橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査員 宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

団員 井上武雄、遠藤 茂、大槻泰人、岡 章、岡 正、春日義人、唐沢光國、小池久人、小嶋久雄、後藤主計、笹川正秋、戸田隆志、戸田勇平、中坪製綾男、野村金吉、伯耆原正、堀五百治、松田貫一、松田幸雄、水田重雄、向山幸次郎、山口今朝人、山口昭平、清水すみ子

## 事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長  
上田 明勇 箕輪町教育委員会社会教育課課長  
原 宏三 箕輪町教育委員会社会教育課係長  
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員  
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員  
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員  
酒井 峰子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員  
宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

## 第3節 調査日誌

3月6日（金） 晴

調査範囲の杭打ちを行った。試掘をしたところ、縄文の土器片と住居址の床らしき堅い面が検出された。

3月7日（土） 晴

重機にて、表土剥ぎを行った。土坑が検出された。

3月9日（月） 晴

遺構上面確認を行った。重機による表土剥ぎも1日中行われた。土坑、住居址が確認された。

3月10日（火） 雨

室内作業。

3月11日（水） 晴

調査団の安全を祈り、神事を執り行った。重機による表土剥ぎと遺構上面確認も引き続き行なわれた。みのわ新聞、箕輪毎日新聞、長野日報が取材に来た。

3月12日（木） 晴

住居址にベルトを残し住居址の掘り下げを始めた。縄文土器片が多量に出土した。

3月13日（金） 晴

住居址の掘り下げと土坑の半掘を行った。住居址は床や壁が搅乱を受けていて明確に検出できないところもあった。土偶の頭が出土した。



3月16日（月） 曇時々雨

住居址の掘り下げ、土坑の半掘、調査区  
東壁の分層を行った。

3月17日～21日

雪などの悪天候のため室内作業。

3月23日（月） 曇後雨

住居址の掘り下げ、土坑の掘り、トレン  
チ、土坑の測量を行った。

3月24日（火） 曇

住居址の掘り下げとベルトの土層断面測量、トレンチの土層断面測量などを行った。住居址  
の柱穴内より伏せた状態で深鉢が出土した。長野日報、箕輪毎日新聞が取材に来た。

3月25日（水） 晴

各土坑の測量、全掘を行った。住居址が掘り上がったので写真を撮った。

3月27日（金） 曇

調査範囲全体を整備し、全体写真を撮った。住居址へメッシュを切り平面測量の準備を行  
った。

4月3日（金） 晴

住居址の遺物の平面測量と土坑の平面測量を行った。

4月4日（土） 晴後曇

住居址の平面測量と遺物の取り上げ、土坑の平面測量を行った。午後は現地説明会を行い、  
南小河内区民、小学校の先生方など約30名と長野日報、みのわ新聞、箕輪毎日新聞が取材に来  
た。

4月6日（月） 晴

住居址の平面測量、柱穴の掘り、土器の  
取り上げを行った。

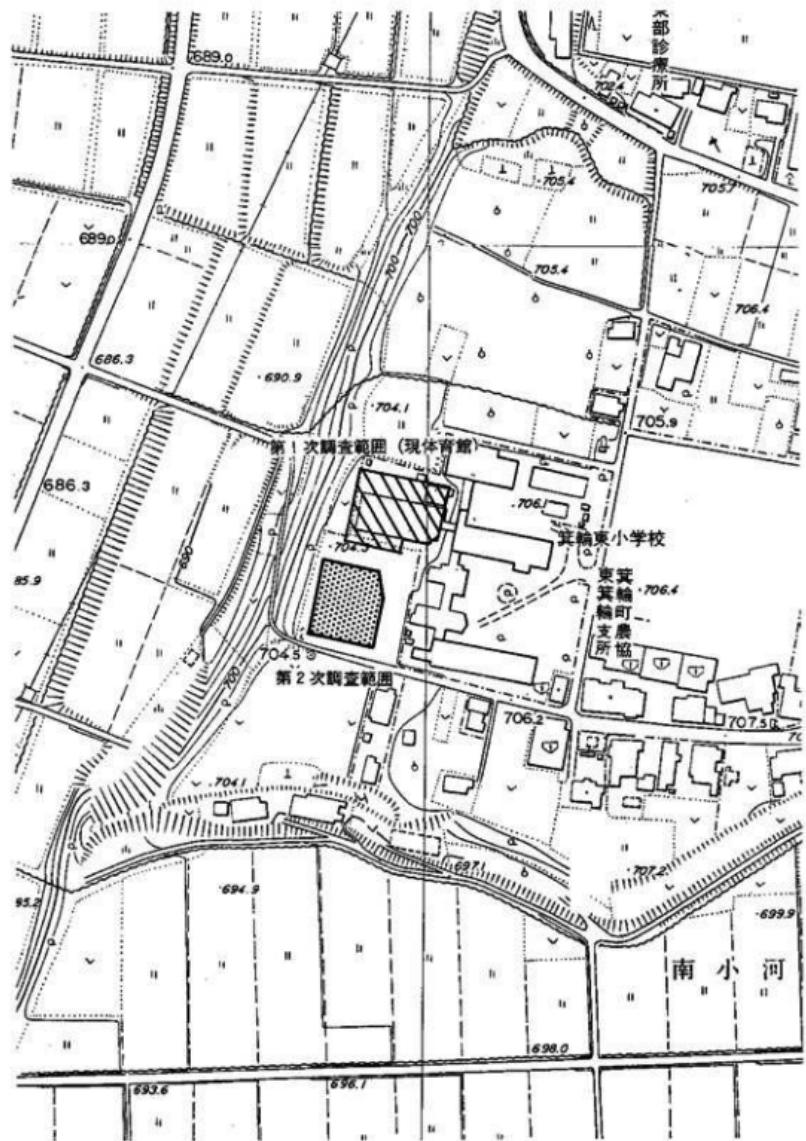
4月7日（火） 曇

全体測量を行った。住居址、土坑の平面  
測量も行った。

4月8日（水） 晴

住居址の平面測量とレベリング、トレン  
チの土層断面測量を行い調査を終了した。





第3図 調査区設定図

## 第III章 遺跡の状態

### 第1節 調査方法と結果概要

今回、調査の対象となった新プール建設地は、平成元年に行われた第1次調査地(現体育館)の南側に隣接する菜園に当たり、同調査地と同様に遺跡の包蔵範囲の西側限界地に位置している。調査範囲は、プール本体及び付属施設の築造工法の関係で、その建設全面積が客土・削平されるため、併せて同全面積を対象とし調査区とした(第3図)。

調査はまず、調査区内に4ヶ所の試掘坑を設定し、土層堆積状況と遺構・遺物の有無を確認するため、手掘りによる試掘調査を行った。これによる土層堆積状況については、後節にて詳細に記述したい。また、調査区の南東に設定した試掘坑内から確認した黒色土内より、縄文土器片が多数出土した。これが今回唯一検出された住居址(1号住居址)であった。その他の試掘坑については、比較的搅乱を受けた土層堆積状況であり、遺構の検出には至らなかった。そしてその結果を踏まえて、重機による表土の除去を行い、その後手作業による遺構上面確認、検出遺構調査を進めた。確認された遺構については、遺構の種別ごとに確認した順で番号を付けた。

グリッドは、5m四方で主軸を南北方向に併せて設定し、南北方向は北よりアルファベットを、東西方向は東よりアラビア数字を用いて標記した。またベンチマークは、調査区の南西に落とされていたベンチマーク(708.262m)を直接使用した。遺物の取り上げは、遺構に伴う中で特に個体として判断したものと、住居址については床面に近い物は全てその位置をドットで記録した後に行った。尚、調査の記録は、平板とやり方の併用による平面測量と、写真撮影を行い、できるだけ出土した遺構・遺物の状況を克明に記録することに努めた。

検出した遺構は、次の通りである。

- ・住居址1軒(縄文時代)
- ・小竪穴4基(時期不明)
- ・土坑10基(縄文時代)

## 第2節 層序

沢川によって押し出されて形成された長岡扇状地は、その西側を南流する天竜川によって扇端部を浸食し、河岸段丘を形成している。本遺跡は、沢川を挟んで扇状地の北側でかつ段丘上に位置している。そしてその一帯における基本的土層堆積状況は、耕作土等の黒褐色腐食土層→軽石・スコリア・ラビリを混入するローム（テフラ）層→花崗岩を主とする円礫・砂層である。これは、天竜川西岸の地域とほぼ同じと言えるが、ただ基盤をなす地質構造が花崗岩及び長石・石英・雲母等花崗岩風化砂礫であるのに対し、西側地域は砂岩・粘板岩等の堆積岩を主体としている点で大きな違いを見せていている。

I層—表土で基本的には菜園の耕作土で明茶褐色であるが、調査区の西部では比較的安定して堆積し、およそ30cmの厚さである。しかし、東部においては、以前に行われていたと考えられる耕作による搅乱や、道路の敷砂利等の盛土など細分が可能で、また30~50cmとその厚さにもばらつきがみられる。

I-1 (明茶褐色土)。3~5cm大の角礫と砂を多く含む。締まりは非常に強いが、粘性は余り認められない。敷砂利による盛り土である。

I-2 (暗茶褐色土)。ロームブロックをわずかに含む。締まりは非常に強く、粘性もややある。以前の地表面と考えられる。

I-3 (茶褐色土)。ロームブロックをわずかに含む。締まりは強く、粘性もややある。

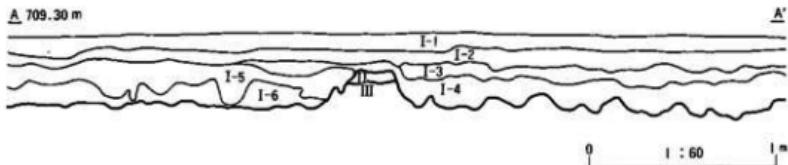
I-4 (暗茶褐色土)。ロームブロックを多く含む。締まりはI-3よりは弱く、粘性はややある。

I-5 (明茶褐色土)。ロームブロックを多く含む。締まりは強く、粘性もややある。

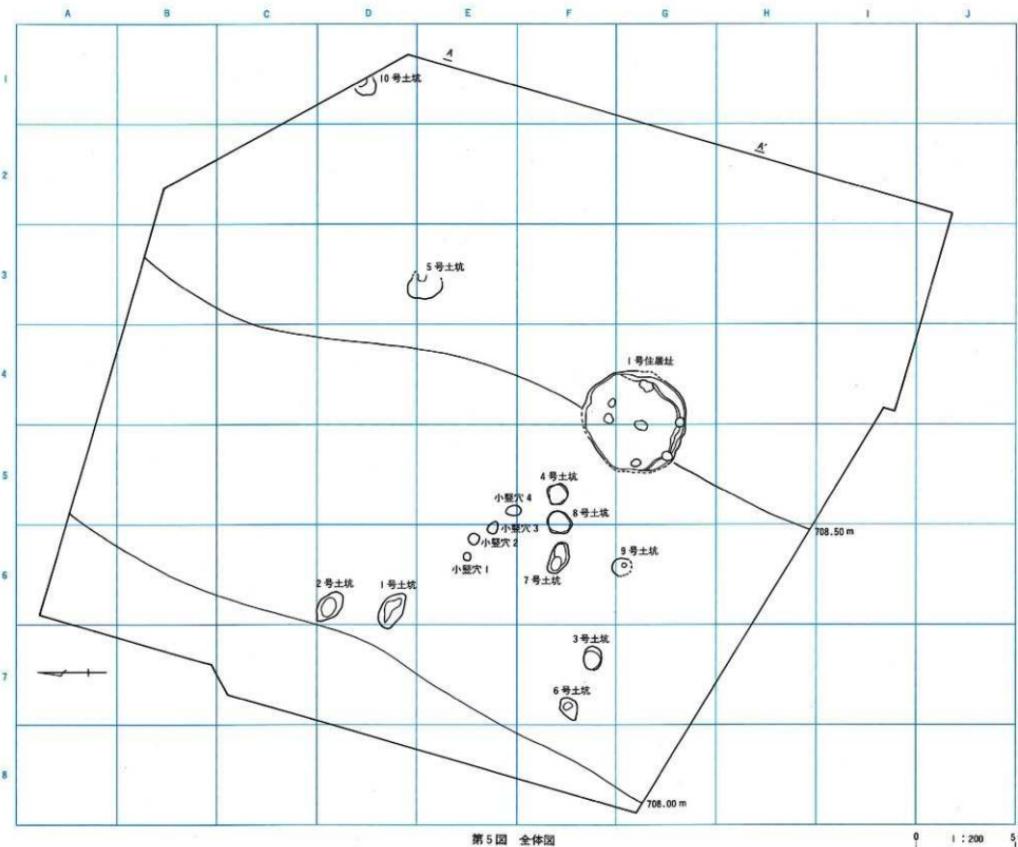
I-6 (黒褐色土)。ローム粒子をわずかに含む。締まりは強く、粘性も強い。

II層—明茶褐色土。ローム粒子をわずかに含む。締まりは強く、粘性は弱い。住居址、土坑等の遺構確認面である。

III層—黄褐色土。ローム層で、締まりは強く、粘性はやや認められる。I層による搅乱は本層にまで及ぶ。



第4図 土層図



第5図 全体図

0 1 : 200 5\*

## 第IV章 遺構と遺物

### 第1節 住居址

#### 1. 1号住居址

遺構（第8図） 調査区のやや南部 F-4・5、G-4・5グリッドに位置する。検出した住居址は、部分的に耕作による攪乱を受けており、プランは明確に検出できない箇所もあった。規模は 5.2×5.0m で、ほぼ円形プランである。床はほぼ中央に位置する炉（R<sub>1</sub>）を中心に平坦に広がり、堅く敲き締められている。南面側の壁を中心には三ヶ月状に 3~5cm の高さでベッド状に一段高い床を有している。前者の床に対し床面は軟弱で敲き締められた形跡はない。主軸は確認された 5 穴の柱穴の間隔状況と、前述したベッド状の一段高い床の配置から考えて、P<sub>1</sub>と P<sub>5</sub>との間に本住居址の出入り口と推測されるが、これを根拠とした場合 N-32°-W を示すものである。

柱穴は、P<sub>1</sub> (42×33×50cm) • P<sub>2</sub> (71×32×58cm) • P<sub>3</sub> (47×44×62cm) • P<sub>4</sub> (61×41×40cm) • P<sub>5</sub> (51×37×58cm) の 5 穴で、P<sub>1</sub> と P<sub>5</sub> 間を除けばほぼ一定間隔と言える。

覆土は、6 分層された。1 層は暗茶褐色土で攪乱土である。粘性・締まり共に強く、炭化物をまばらに含んでいる。2 層は茶褐色土で、粘性・締まり共に強い。炭化物をまばらに含んでいる。3 層は黒褐色土で、粘性は強いが締まりは 2 層よりも弱い。炭化物・焼土を多く含み、土器片等の遺物を多く出土する。4 層は暗茶褐色土で 1 層同様攪乱である。粘性は強いが締まりはやや弱い。黒褐色・茶褐色土をまばらに含んでいる。5 層は明茶褐色土で粘性・締まりは共に強い。ロームブロックをまばらに含む。6 層は黄褐色土で粘性は強いが締まりはやや弱い。ローム粒子を多く含んでいる。

炉は、本住居址のほぼ中央に位置する R<sub>1</sub> である。77×49cm の規模で、プランは梢円形を呈している。掘り込みはレンズ状に 10cm 余と深さは浅い。また、内面にみられる火焼状況はあまり認められず、覆土内に焼土がまばらに含まれるだけで、炉としての使用期間は少なかったものと思われる。本住居址内からは、被熱を受けた転石の出土が数点みられたが、炉石として使用されたものとは考えにくい比較的小さなものであり、炉の凹み自体にも石が使用されていた形跡もないため、単純な地焼炉と言えよう。覆土は、ロームブロック・焼土・炭化物をまばらに含む黒褐色土の單一層で、粘性は弱く締まりはやや認められる。尚、柱穴 P<sub>1</sub> 隣に、内面に火焼状況を示す 48×38cm の規模で円形プランを呈する凹み（R<sub>2</sub>）が検出している。掘り込みは R<sub>1</sub> と同様に 15cm と浅い。位置的な問題もあるが、R<sub>1</sub> との共通点も多いことから、炉としての

可能性はある。覆土は2分層された。1層は暗茶褐色土で、ローム粒子をまばらに含む。2層は暗茶褐色土。共に粘性は弱く、締まりはやや認められる。

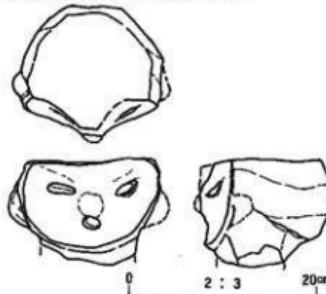
遺物（第6図～15図） 本住居址からは、土製品（第6図）、土器（1～55）、石器（56～72）が出土している。主に床面直上及び床面に近い覆土中より出土した遺物の出土状況を観察すると、柱穴P<sub>1</sub>と炉（？）R<sub>2</sub>周辺部、柱穴P<sub>4</sub>とP<sub>5</sub>周辺部、炉R<sub>1</sub>周辺部、そして柱穴P<sub>3</sub>内などで、土器を中心としてこれらブロック単位に出土の集中がみられる。それは、土器の個体となる接合状況とほぼ比例している。また、5の土器のように柱穴P<sub>3</sub>内にはほぼ原形のまま埋設した状況で出土している点は、柱穴内より柱根が抜けた後に埋設もしくは流入したものであり、本住居址が自然倒壊というよりむしろ意図的に廃絶された可能性が考えられる（第8図）。

土製品は、土偶の頭部片が1点のみ出土している。これは、頭の上部が偏平となる形状の特徴を持つもので、俗に「河童型土偶」と呼ばれるものと言えよう。鼻や左耳などが欠損するものの、顔の表情が明確にうかがうことができる。

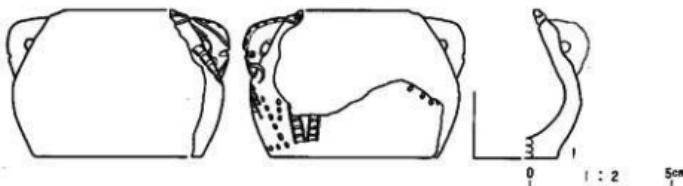
土器は、縄文時代中期初頭時期の特徴を示すものである。器種は、中・小型の深鉢（2～52）が主体で浅鉢（53、54）、1点のみ有孔把手付きミニチュア土器（1）も含まれる。深鉢の器型は、キャリバー型を呈し脛部は膨らむもの（2～4）と、そうでないもの（5～7）とに分かれ、口縁部も波状をなすもの（2、7）と小突起を有するもの（3、5、15）などみられる。文様は、縄文及び結節縄文を地文とし、半截竹管状工具を用いた並行・連続する弧状、Y字などの沈線文、爪型隆帶文、ヘラもしくは棒状工具による刺突文等の組み合わせで構成される。

その他、無文の円筒形と思われるもの（27～29）もみられる。また8については、朝顔状に大きく外反する口縁形態や文様構成、更に胎土・焼成・色調・器厚など他と大きな相違を見せるものも含まれる。

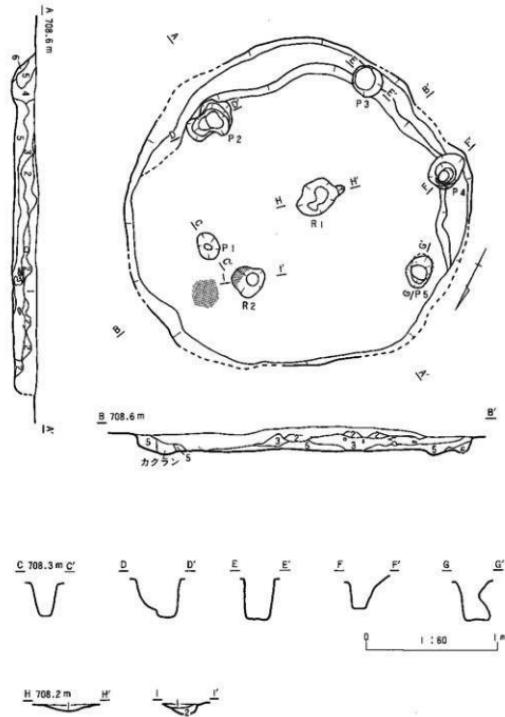
石器は、石錐（56、57）、石錐（58）、打製石斧（59～61）、横刃型石器（62、63）、凹石・磨石（64～68）、石皿（69～71）、石核（72）が認められる。



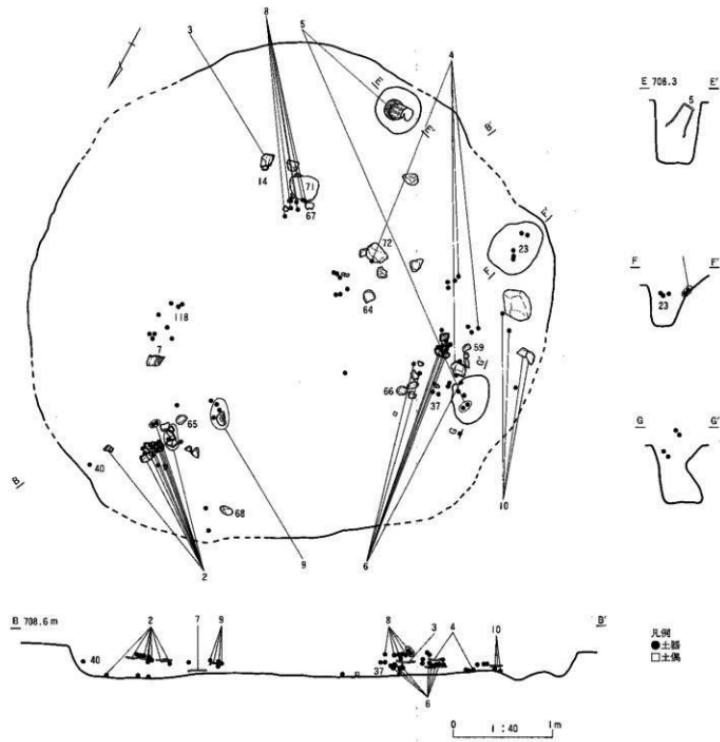
第6図 1号住居址出土土偶実測図

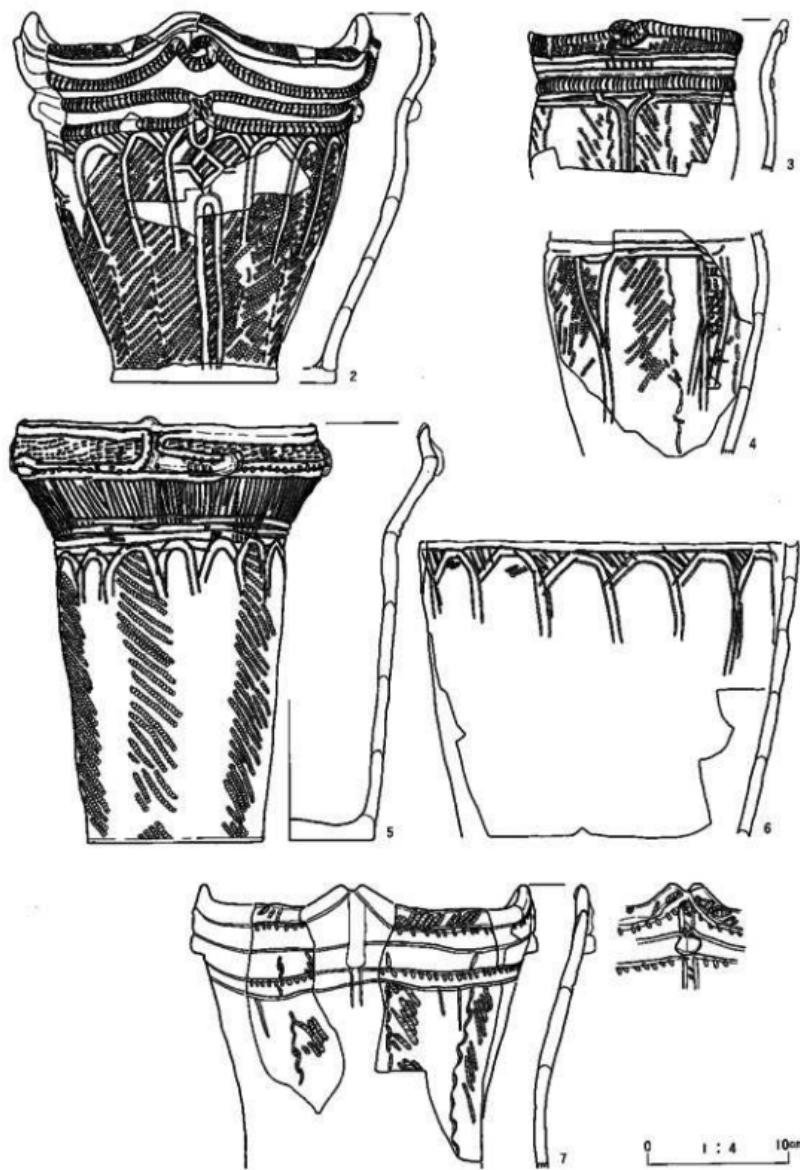


第7図 1号住居址出土土器実測図

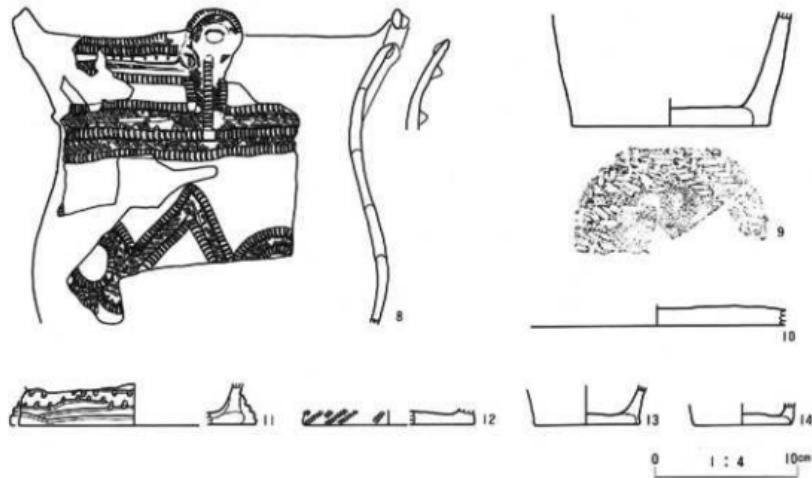


第8図 I号住居址実測図・遺物出土状況図

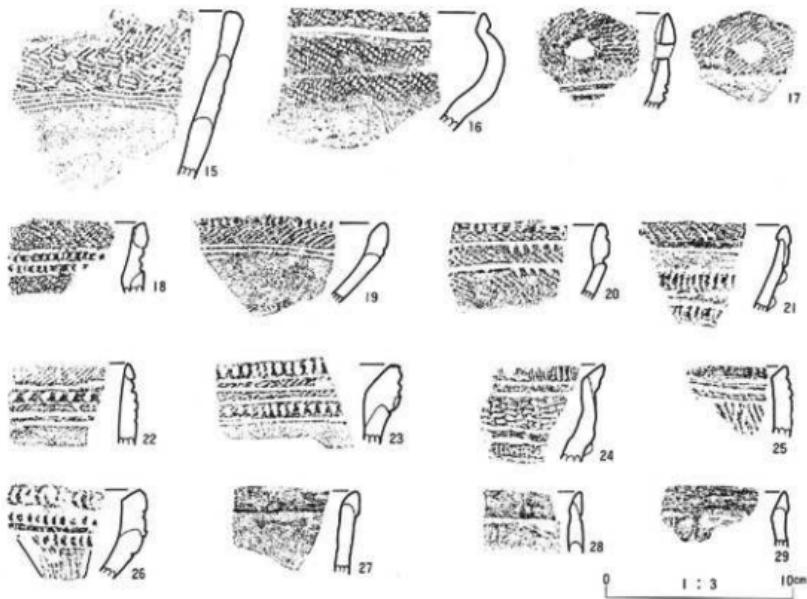




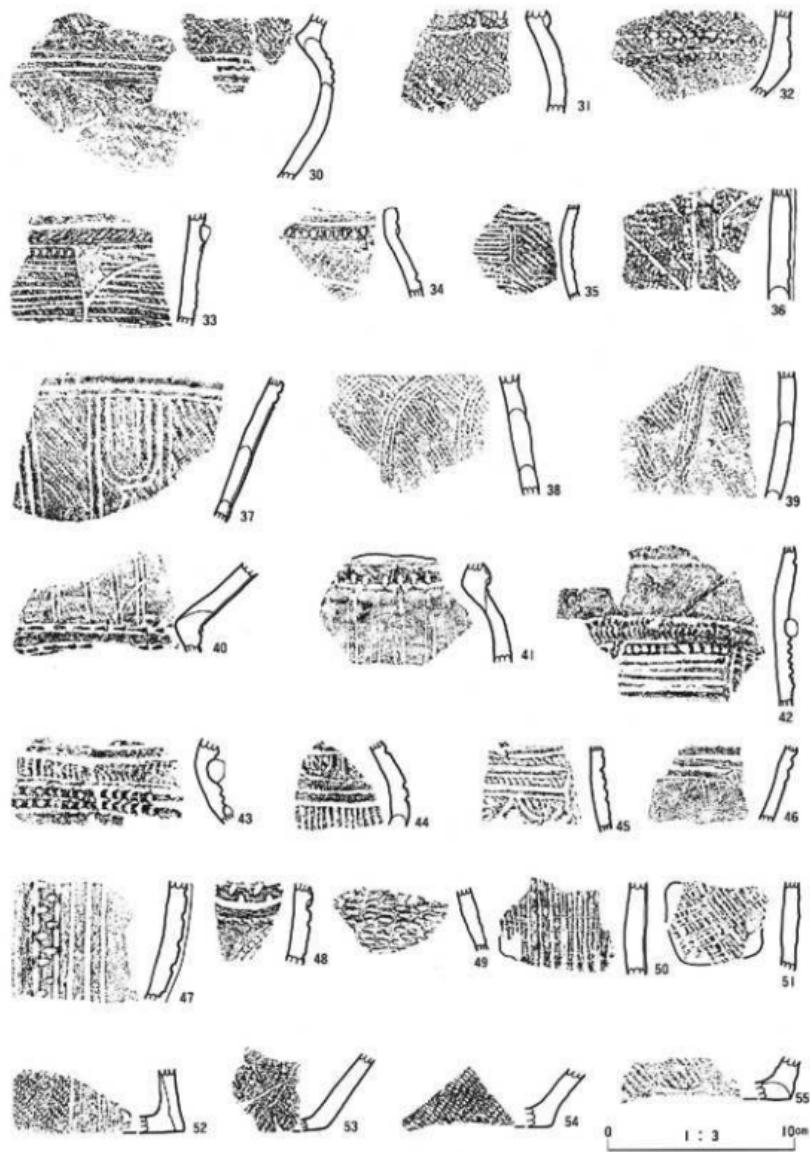
第9図 1号住居址出土土器実測図2



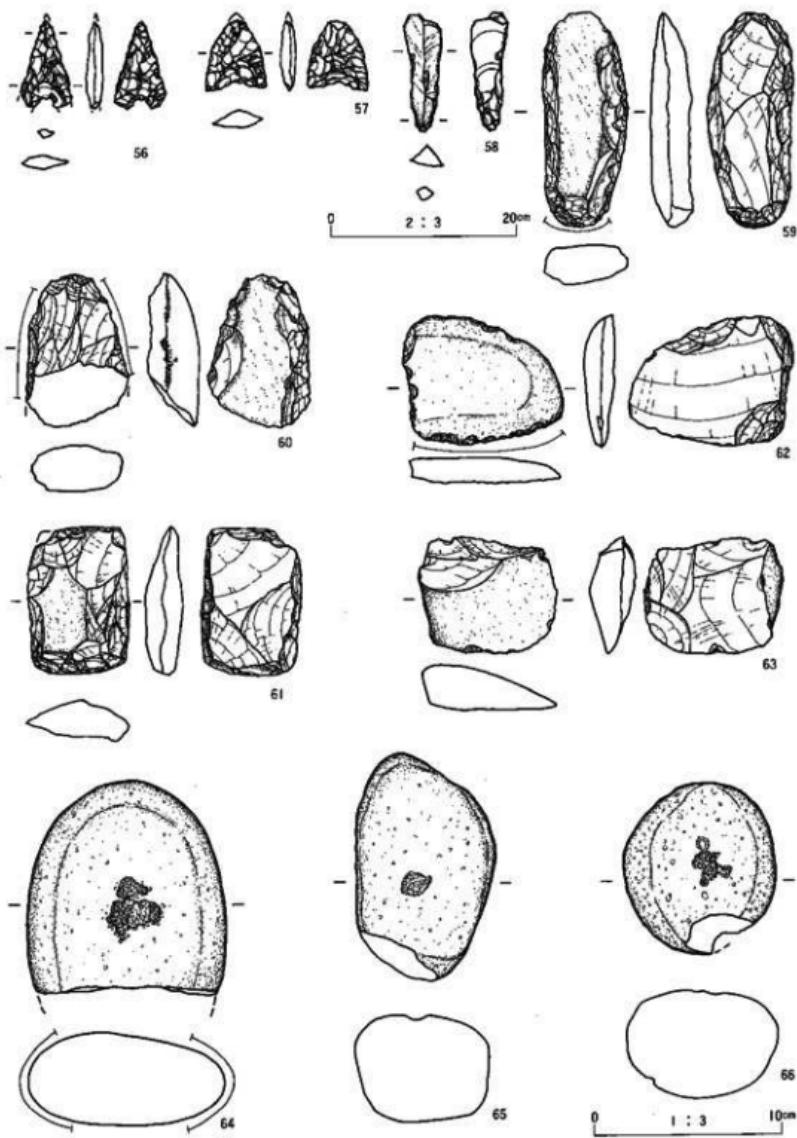
第10図 1号住居址出土土器実測図3



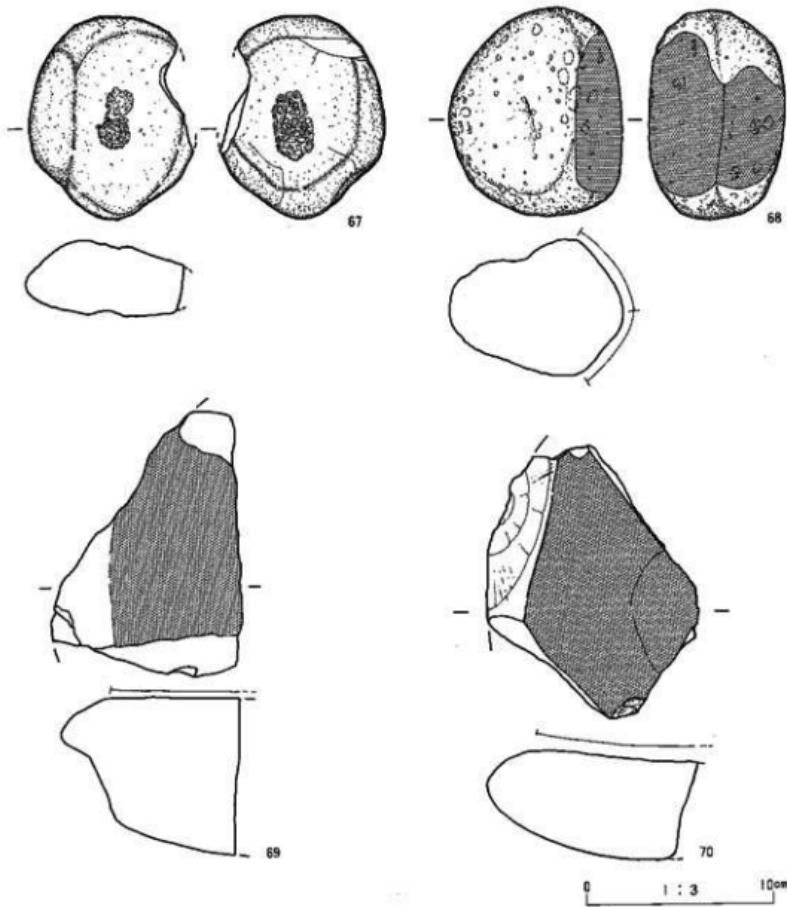
第11図 1号住居址出土土器拓影図1



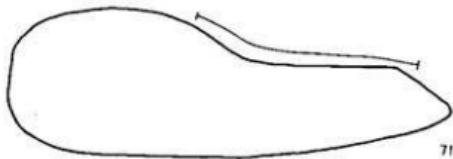
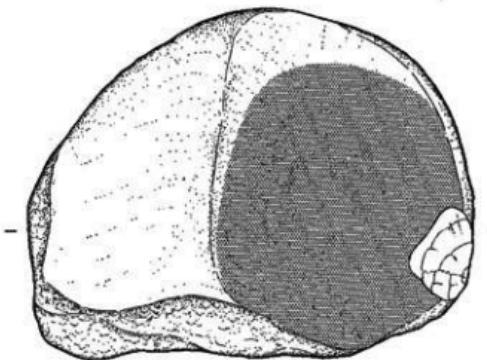
第12図 1号住居址出土土器拓影図2



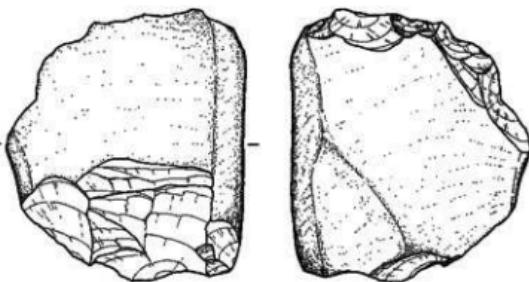
第13図 1号住居址出土石器実測図!



第14図 1号住居址出土石器実測図2



71



72



0 1 : 4 10cm

第15図 1号住居址出土石器実測図3

第2表 I号住居出土土器観察表

(法量欄：上段=口径、中段=底径、下段=器高)

番号	器種	残存度	法量 (%)	成形及び器形の特徴	文様及び調整	備考
1	ミニチュア 土器	20	3.8 5.9 5.2	・輪積み成形 ・把手が2ヶ所に付けられ、口縁部には穴が開けられている。	・半裁竹管状工具による結節状沈線文?が施される。また丸いようじの頭のような工具での刺突文が施されている。	・褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
2	深鉢	30	22.5 — (25.3)	・4単位から成る波状口縁 ・輪積み成形 ・頸部はややくびれ、底部は緩やかに膨らみをみせる。	・単節LR繩文を地文とし、半裁竹管状工具による連続弧状沈線文を施す。 ・頸部には爪型裝帶文を貼付する。	・褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
3	深鉢	30	15.0 — (10.7)	・輪積み成形 ・口縁部に2ヶ所の突起を有する ・頸部はややくびれ、底部は緩やかに膨らみをみせる。	・単節RL繩文を地文とし、半裁竹管状工具による横位沈線文及びY字状文が施される。 ・口唇部、頸部に爪型裝帶文を貼付する。	・褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒をわざかに含む ・焼成良好
4	深鉢	10	— — (16.0)	・輪積み成形 ・底部は緩やかな膨らみをみせる。	・単節LRの繩文を地文とし、半裁竹管状工具による沈線文	・褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒をやや多めに含む ・焼成良好
5	深鉢	98	20.0 12.0 30.2	・輪積み成形 ・口縁部に4ヶ所の突起を有し、又、「く」の字に内折する頸部はくびれ、底部はやや膨らみをみせ底部へ傾く。	・単節RL繩文を地文とし、半裁竹管状工具による連続弧状沈線文を施す。 ・口縁部に近い箇所に刻目が施される。	・褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
6	深鉢	30	— — (21.0)	・輪積み成形 ・底部はほぼ直線的に立ち上がる。	・半裁竹管状工具による連続弧状沈線文を施す。 ・一部単節LR繩文がみられるが、すり消されている。	・褐色
7	深鉢	20	(22.2) — (20.1)	・輪積み成形 ・口縁部に4ヶ所突起を有する。 ・口縁部は緩やかに「く」の字に内折し、底部はやや外湾する。	・無節LRの羽状繩文を頸部から底部にかけて施している。又、口縁部にもつけられていて。 ・口縁部にヘラ状工具による刻目が施される。	・赤褐色 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
8	深鉢	10	(26.2) — (22.4)	・輪積み成形 ・口縁部にループ状の突起を有する。(4ヶ所か?) ・口縁部は朝顔状に大きく外反する。	・爪形押引き文区画(円形、山形等)によるRL繩文、縫合文、印刻文の組み合わせで文様構成。	・断面は黒色。内外面は純褐色。 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
9	深鉢	10	— 13.8 (8.0)	・輪積み成形	・底は網代底。	・褐色 ・底部 ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・焼成良好
10	深鉢	10	— 18.0 (1.0)			・明褐色 ・底面のみ
11	深鉢	10	— 8.7 —	・輪積み成形	・半裁竹管状工具による沈線が横位に走り、沈線上には刺突文が施される。	・褐色 ・底部のみ
12	深鉢	5	— 12.2 (1.0)	・輪積み成形	・単節LR繩文が施される。	・褐色 ・底部のみ ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・内面に炭化物が付着
13	深鉢	5	— 7.6 (2.6)	・輪積み成形		・褐色 ・底部のみ ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む ・内面にやや炭化物が付着
14	深鉢	5	— 6.8 (1.5)	・輪積み成形		・褐色 ・底部のみ ・長石、石英、雲母等の砂粒を含む

第3表 I号住居址出土石器観察表

(法量欄: 上段=長さ、中段=最大幅、下段=厚さ)

番号	分類	石質	法量	重さ	諸特徴	備考
			(cm)	(g)		
56	石 鋸	黒曜石	(2.4) 1.3 0.4	(0.75)	・凹溝無基部	・先端が欠損 ・茎部が欠損
57	石 鋸	黒曜石	(1.8) 1.6 0.5	(0.97)	・凹溝無基部 ・基部の抉りはあまり入らない。	・先端が欠損
58	石 鋸	黒曜石	3.2 1.0 0.6	1.45	・断面は三角形	
59	打製石斧	鶴嘴母岩	11.4 4.4 2.1	170	・短錐型で刃部は丁寧な調整が成される。	・表面に自然面を残す
60	打製石斧	鶴嘴母岩	8.2 4.9 2.4	150	・橢円か? ・側縁部に打痕(調整痕か?)が認められる	・裏面に自然面を残す ・下部欠損
61	打製石斧	砂岩	7.8 5.3 2.0	90	・長方形に整形される。 ・両部はほぼ直線上になる	
62	横刃型石器	砂岩	6.9 8.7 1.3	105	・片面に自然面を残す剥片を用い、その側縁部を刃部として使用する。	・表面に自然面を残す
63	横刃型石器	砂岩	6.2 7.1 2.4	100	・片面に自然面を残す剥片を用い、その側縁部を刃部として使用する。	・裏面に自然面を残す
64	凹石・磨石	角閃石 安山岩	(11.5) 10.6 5.0	(1,030)	・表面のほぼ中央に浅い傷状の凹痕を有し、側面は磨痕が残る。	・一部欠損
65	凹 石	細粒岩	12.3 7.5 6.0	(690)	・表面のほぼ中央に凹痕を有する。	・裏面に自然面を残す
66	凹 石	多孔質 安山岩	9.3 8.0 5.8	(340)	・表面のほぼ中央に凹痕を有する。	・焼けている
67	凹 石	砂岩	10.9 8.7 3.9	(490)	・両面共、ほぼ中央に凹痕を有する	・焼けている ・一部欠損
68	磨 石	多孔質 安山岩	11.2 9.4 7.2	920	・原石の一側縁部の両側に2面の磨面を有する ・その他の磨面、打痕等は確認されない。	
69	石 盤	砂岩	(14.3) (10.0) 8.5	(1,530)	・表面に磨痕を有する。	・欠損
70	石 盤	砂岩	(14.6) (11.4) 5.4	(1,190)	・表面に磨痕を有する	・欠損
71	石 盤	黒雲母 花崗岩	31.6 24.7 10.7	11,000	・表面は全体的に磨られており、使用頻度は高い。	・一部欠損
72	石 棱	砂岩	19.2 17.0 6.4	2,500	・大まかな剥離痕が残る	

## 第2節 小豎穴・土坑

### 1. 小 豎 穴 (第16図)

小豎穴は本調査区より4基検出している。規模・形状等の違いから、後述する土坑とは類別して扱った。

平面形態には、円形を呈するもの(1・2号)と、梢円形を呈するもの(3・4号)とがある。断面形はほぼ台形である。深さは20cmと浅く、覆土も明茶褐色土の單一層である。底面の形状も平らなもの(3号)と、浅い凹みを有するもの(1・2・4号)とが認められる。また、遺物の出土はなかった。

以上のように、個々に見られる出土状況からは、その内容・性格は不明と言える。しかし、4基の小豎穴が一定の間隔による列状を呈していることから、小豎穴群として捕らえることが妥当と思われる。

### 2. 土 坑 (第16図)

擾乱や調査区外に広がる等の関係で、形状のはっきり捕らえられないものも見られたが、主に形態の特徴(残存部から推定を含む)からほぼ2つのタイプに分類される(第17条)。

#### A 類

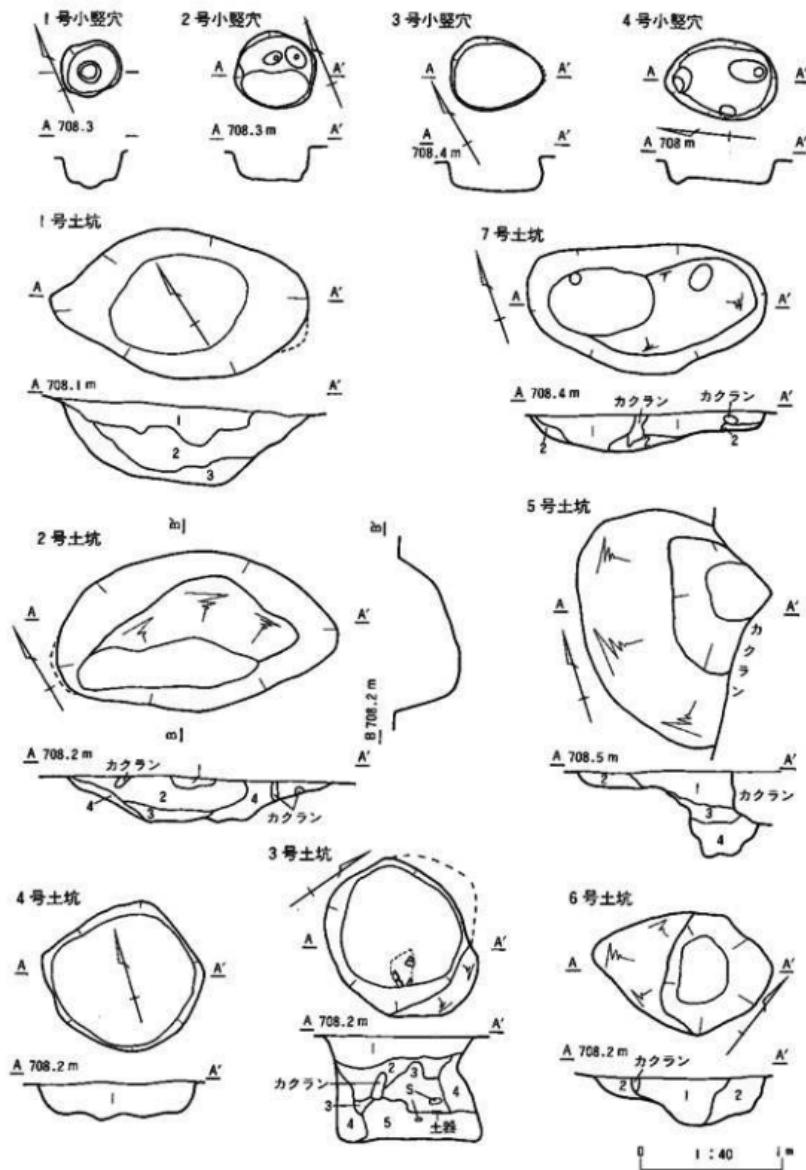
平面形は比較的整った円形プランを呈し、垂直もしくはやや袋状に掘り込まれ、ほぼ平らに底面を作出している。また断面形は台形となるもので、3・4・8～10号土坑がこれに当たる。特に、覆土の堆積も規則性があり、遺物の出土量も豊富であった。

出土遺物は、1号住居址と同様に縄文時代中期初頭の土器(1～10)、打製石斧(14)・磨製石斧(15)等の石器がみられる(第18図)。

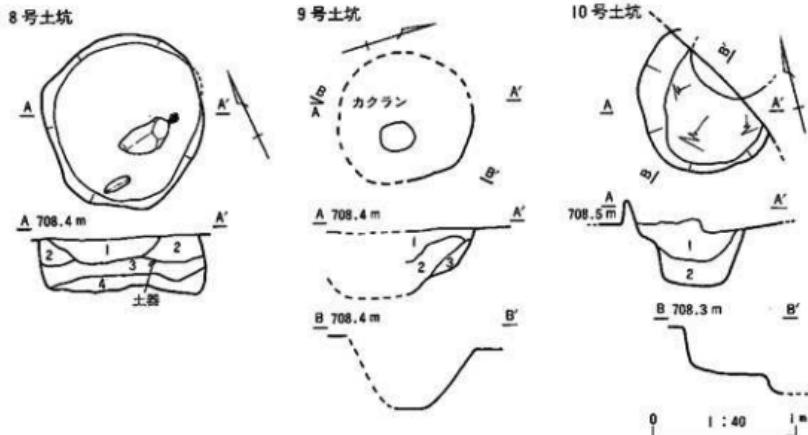
#### B 類

平面形が梢円形を呈するものを基本とし、やや不整形なものもこれに含む。すり鉢状に掘り込まれるため、底面はあまり平らではなく、壁面と底面との差がはっきりとしない。また、壁面、底面共、丁寧に作出されておらず、比較的凹凸が目立つ。1・2・5～7号土坑がこれに当たる。尚、覆土にみられる土層堆積は、A類と同様に規則性がみられる。

出土遺物は、固化不可能な縄文土器片を少量出土するのみで、遺物を包含しない土坑が主であった。



第16図 小竪穴、土坑実測図



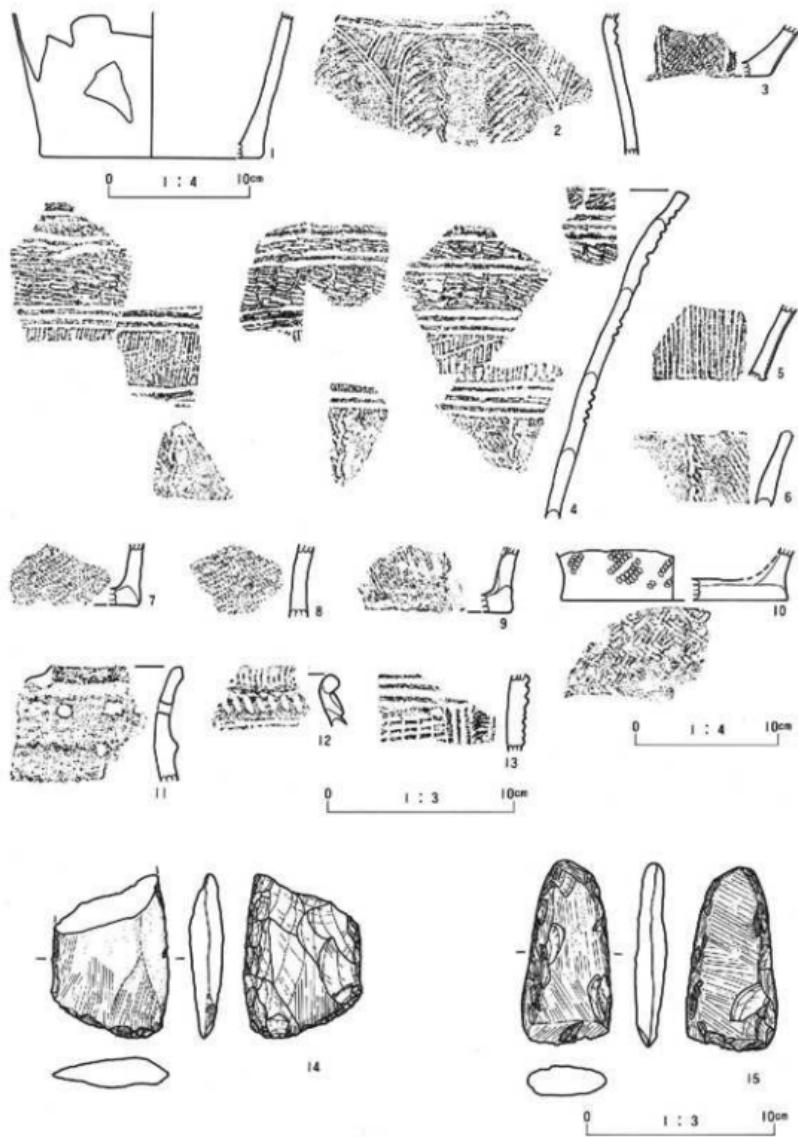
第17図 土坑実測図

第4表 小堅穴一覧表

(規模：上段＝長径、中段＝短径、下段＝深さ)

番号	平面	断面形	規模	覆 土		しまり 強 弱	考 察
				上段	中段		
P-1	円 形	台 形	(cm) 43 42 24	1層：明茶褐色土。ローム粒子をわずかに含む。			
P-2	円 形	台 形	59 56 24	1層：明茶褐色土。ローム粒子をわずかに含む。		強 弱	
P-3	椭円形	台 形	67 53 22	1層：明茶褐色土。ローム粒子をわずかに含む。		強 弱	
P-4	椭円形	台 形	77 57 16	1層：明茶褐色土。ローム粒子をわずかに含む。		強 弱	

(注：P = 小堅穴の略記号)



第18図 土坑出土遺物実測図・拓影図

第5表 土坑一覧表

(規模：上段=長径、中段=短径、下段=深さ)

番号	平面	断面形	規模	覆 土		しまり	粘性	備 考
				(cm)				
D-1	橢円形	半円形	(150) 106 55	1層：暗茶褐色土（ローム粒子をわずかに含む） 2層：黒褐色土（ローム粒子をわずかに含む） 3層：明茶褐色土（細砂をわずかに含む）	中 中 中	中 中 中		
D-2	椭円形	台 形	198 112 30	1層：茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 2層：黒褐色土（ロームブロックをまばらに含む） 3層：暗茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 4層：明茶褐色土（ロームブロックをまばらに含む）	中 中 弱	中 中 中		
D-3	椭円形	台 形 (一部袋状)	120 96 75	1層：茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 2層：暗茶褐色土（ローム粒子をわずかに含む） 3層：黒褐色土（ローム粒子をまばらに、石・土 器を含む） 4層：黄褐色土 5層：黒褐色土	弱 弱 弱	中 中 中		出土遺物 1~3
D-4	円 形	台 形 (一部袋状)	115 106 27	1層：茶褐色土（炭化物をまばらに含む）	強	強		
D-5	(橢円形)	不 明 (台形か?)	(171) (134) 62	1層：暗茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 2層：茶褐色土（ロームブロックを含む） 3層：茶褐色土 4層：黒褐色土（ローム粒子をまばらに含む）	中 中 中 弱	中 中 中 強		
D-6	橢円形	不 整 台 形	127 87 34	1層：茶褐色土（ロームブロック、暗茶褐色土を まばらに含む） 2層：明茶褐色土（ロームブロックをまばらに含む）	中 中	中 中		
D-7	橢円形	不整半円形 (一部台形)	169 92 26	1層：暗茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 2層：黄褐色土	中 中	中 中		
D-8	円 形	台 形	123 110 40	1層：暗茶褐色土（ローム粒子をわずかに含む） 2層：明茶褐色土（炭化物、土をわずかに含む） 3層：黒褐色土（ローム粒子、炭化物をわずかに 含む） 4層：黄褐色土（細砂をわずかに含む）	中 中 中 中	中 中 中 中	14	出土遺物 4~6、
D-9	(橢円形)	不 明 (台形か?)	(96) (75) 45	1層：明茶褐色土 2層：明茶褐色土（ローム粒子をまばらに含む） 3層：黄褐色土	中 中 中	中 中 中	15	出土遺物 7~9、
D-10	(橢円形)	台 形	(105) (69) 23	1層：茶褐色土 2層：明茶褐色土	中 中	中 強		出土遺物 10

(注：D=土坑の略記号)

第6表 土坑出土土器観察表

(法量標：上段=口径、中段=底径、下段=器高)

番号	器種	残存度	法 量	成形及び器形の特徴		文様及び調整	備 考
				(%)	(cm)		
1	深鉢	10	— (16.0) (10.4)	・輪積み成形			・赤褐色 ・長石、石英、雲母等の砂 粒を多く含む ・風化が著しい。 ・3号土坑
10	深鉢	10	— (8.0) (3.4)	・輪積み成形		・単純JLR文様が施される。 ・底面は網代板。	・において褐色 ・長石、石英、雲母等の砂 粒を多く含む ・焼成良好。

第7表 土坑出土石器観察表

(法量標：上段=口径、中段=最大幅、下段=器高)

番号	分類	類 石	質 法 量	重 き	諸 特 徴		備 考
					(cm)	(g)	
14	打製石斧	チャート	(8.7) 6.2 1.5	(112)	・刃部の後退は少ないが、表面剥離、使用度 の激しさを示す磨耗が顕著にみられる。		・上部欠損 ・8号土坑内出土
15	磨製石斧	粘板岩	9.9 4.3 1.6	110	・刃部は両平刃と思われる。刃は裏面の方が 長く、丁寧に作出される。表面の刃部は使 用痕が確認できるが、使用頻度は低い。		・9号土坑内出土

## 第VI章　まとめ

大垣外遺跡における発掘調査は、平成元年度に町立箕輪東小学校体育館改築工事に先立って行われ、縄文時代中期初頭および晩期末に当たる各遺構・遺物が出土し、更に平安時代の須恵器・土師器等が採集され、大きな成果を得ている。今回の調査は、同校プール新築工事に伴って行われた第2次調査であり、第1次調査区の南側に隣接する一帯に当たる。当初から、縄文時代中期初頭を中心とする遺構、特に住居址の検出による本時期の集落遺構の一端が解明できるのではと大きな期待がかかっていた。調査の結果及びその内容については、前各章にて図化・記述の通りであり、本章ではそれらについて若干の考察を加え、問題点の提起及び今後予想される調査の展望を行います。

検出した遺構は、住居址1軒、土坑10基、小堅穴4基であり、住居址及び土坑のA類とした各遺構より出土した土器の内容から、縄文時代中期初頭に位置づけることができよう。土器の特徴として半截竹管状工具による沈線文・爪形隆帶文と、結節縄文との組み合わせにより幾何学的な文様構成を行うもので、「五領ヶ台式」に比定されるものであり、周辺地域では「梨久保式」がこれにあたる。特に沈線文は、「Y」字状の連続する半円弧文を施すものが数多くみられ、縄文も結節区画による斜縄文が主であり、羽状縄文はみられない。更に、「古神遺跡」で出土したいわゆる「舞場式」と称される並行沈線文を主体とする文様構成を行うものは、極めて少ないと感じられる。また、1号住の8の土器にみられるように、モチーフの違い、器形の違い、胎土・色調・器厚の違いなど、本地域所産のものとは考えにくいものである。しかし、それがどこからの搬入土器であるのか、それとも在地の土器であるかは類例が少ないため、今後の大きな課題となろう。

尚、本遺跡は学校用地を中心として広がる遺跡であり、前回の調査でも結果として得られたことであるが、今回も遺跡の西側限界域での調査であり、前回同様遺構の検出は東側に向かって増加する傾向にある。いづれにしても今後予想される同校各施設の改築計画及び周辺地域での開発計画に、この保護・保存に注意を払っていかなければならない。

末筆ではありますが、調査の進行に深いご理解とご協力をいただきました南小河内区並びに学校関係者、発掘調査関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

### 参考・引用文献　(著者名50音順)

- |          |                                     |
|----------|-------------------------------------|
| 今村啓爾     | 1985 「五領ヶ台式土器の編年」東京大学文学部考古学研究室紀要第4号 |
| 江坂輝彌     | 1949 「相模五領ヶ台貝塚調査報告」考古学集刊第3冊         |
| 岡谷市教育委員会 | 1986 「梨久保遺跡」                        |

- 長野県教育委員会 1974 「堂地・中道遺跡」県中央道埋文調査報告書
- 長野県史刊行会 1891 長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表
- 長野県史刊行会 1983 長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版
- 長野県史刊行会 1988 長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物
- 財長野県埋蔵文化財センター 1987 「第4節 大洞遺跡」中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書
- 登戸 健 1981 「五領ケ台土器」 繩文土器大成2
- 三上 徹也 1987 「梨久保式土器 再考」 長野県埋蔵文化財センター紀要1
- 箕輪町教育委員会 1988 「源波古墳」
- 箕輪町教育委員会 1988 「一之沢遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1989 「普済寺遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1990 「大垣外遺跡」
- 箕輪町教育委員会 1991 「古神遺跡」
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976 箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
- 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986 箕輪町誌 第2巻 歴史編
- 山口 明 1978 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編年」 聖台史学第43号
- 山本 典幸 1988 「五領ケ台式土器様式」 縄文土器大成第3冊 中期II

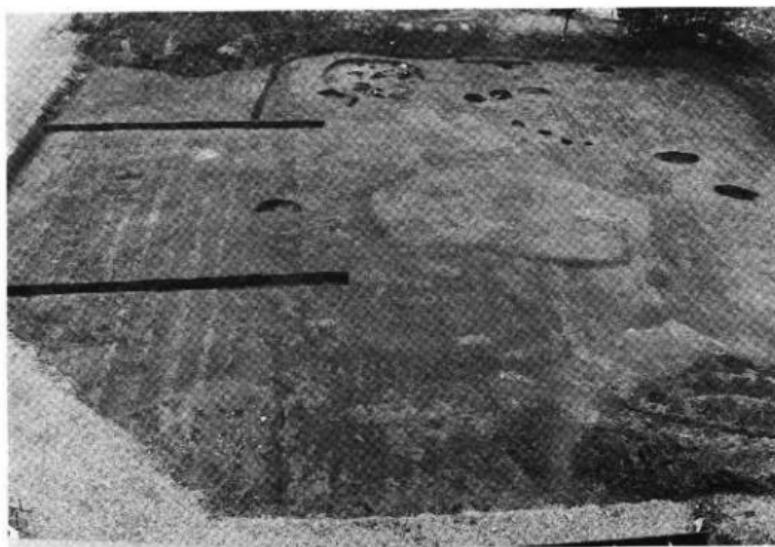


# 図 版

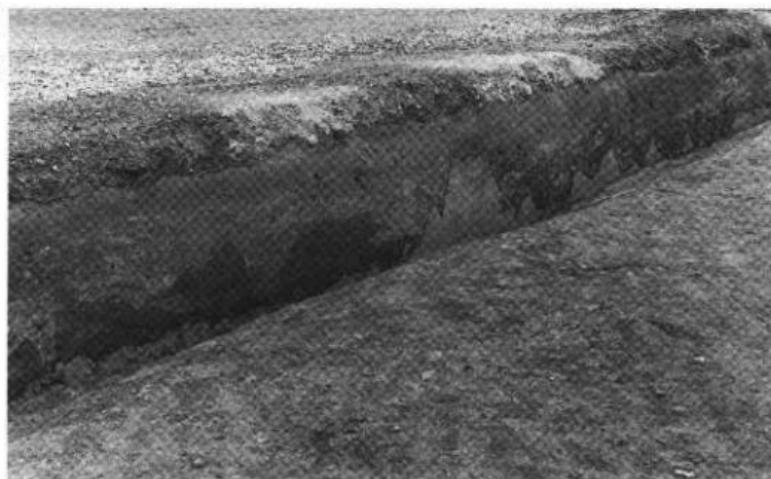




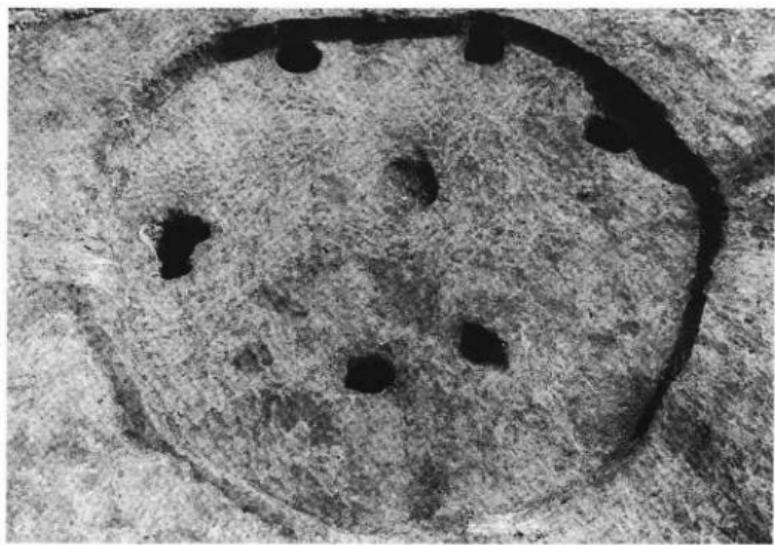
調査地近景（南より）



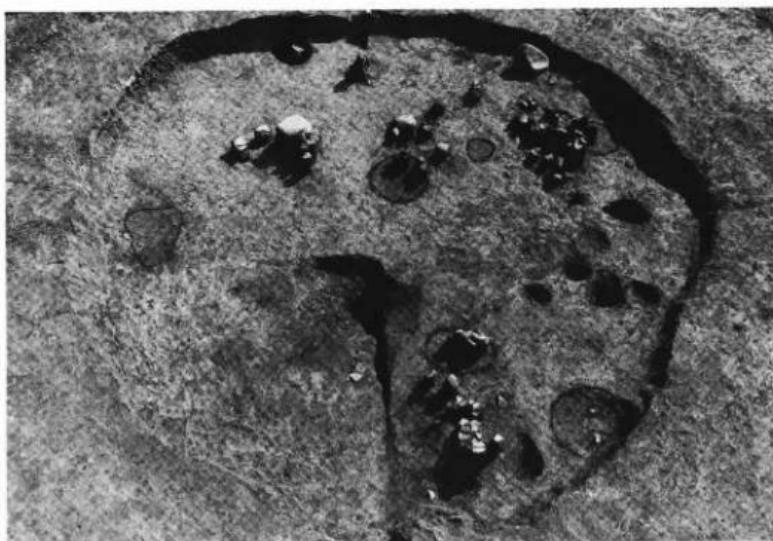
調査地全景（南より）



土層断面



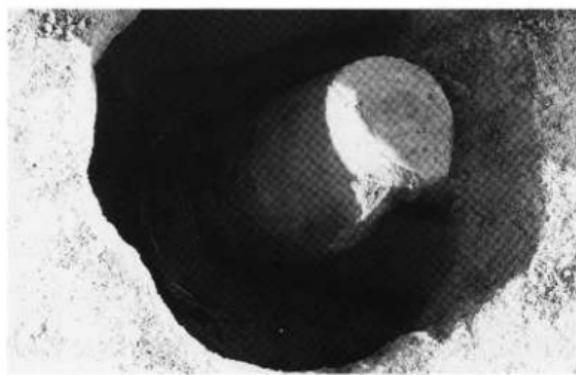
1号住居址



I号住居址遺物出土状況全景



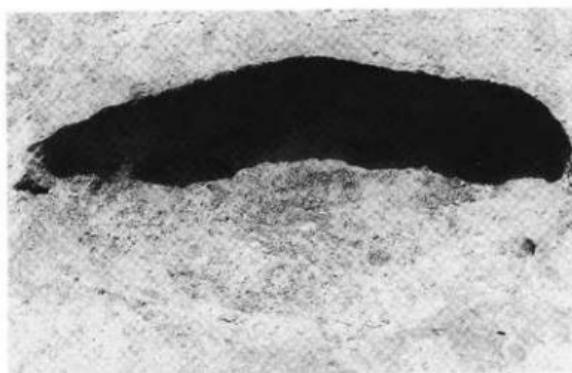
I号住居址土偶出土状況



I号住居址遺物出土状況



1号土坑

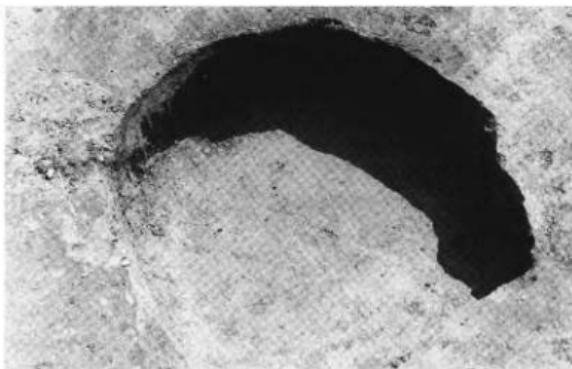


2号土坑



3号土坑

圖版  
6



4号土坑

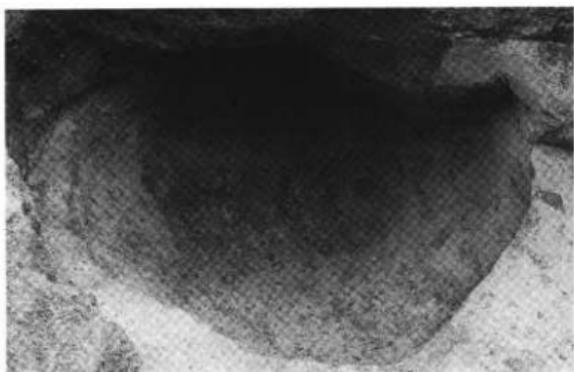
7号土坑



7号土坑



8号土坑



10号土坑



1号小竪穴



2号小竪穴



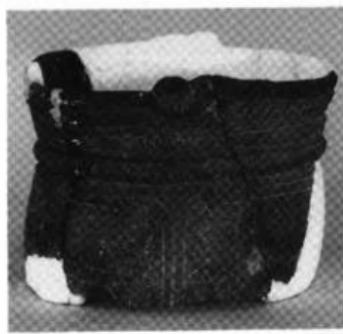
3号小竖穴



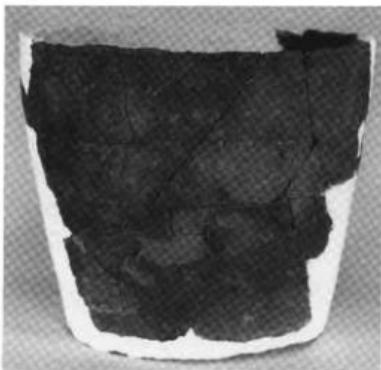
4号小竖穴



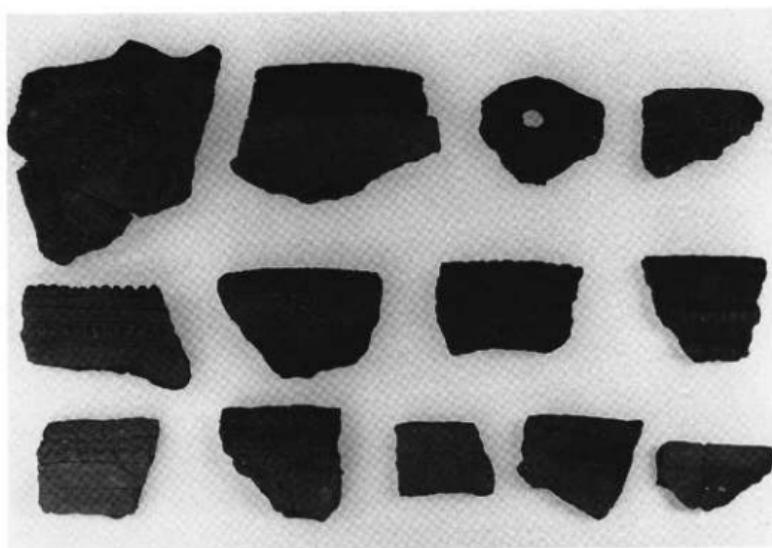
調查風景



出土土器 I (I号住居址)



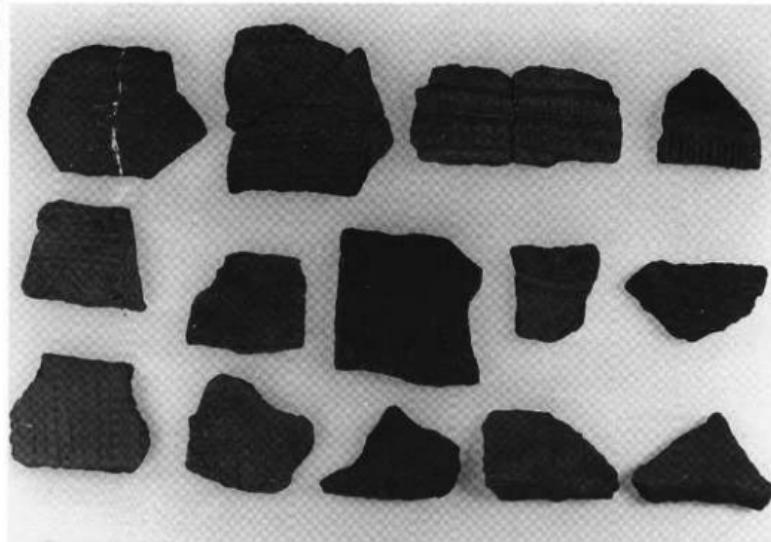
出土土器 2 (1号住居址)



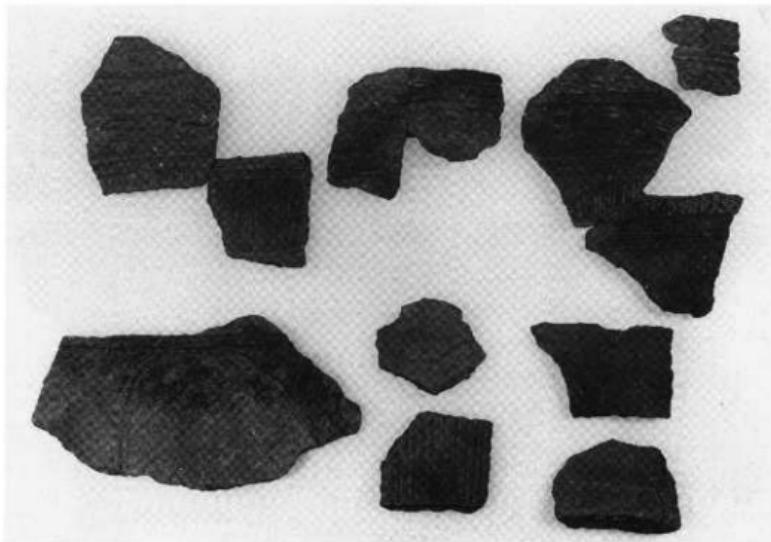
出土土器 3 (1号住居址)



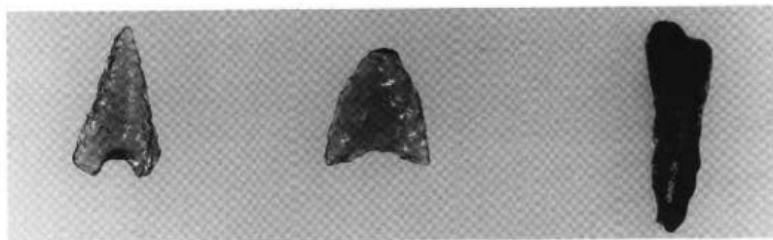
出土土器 4 (1号住居址)



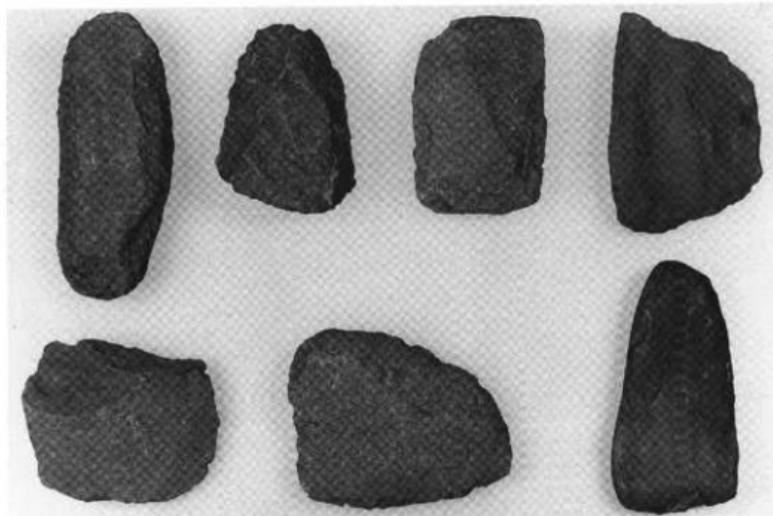
出土土器 5 (1号住居址)



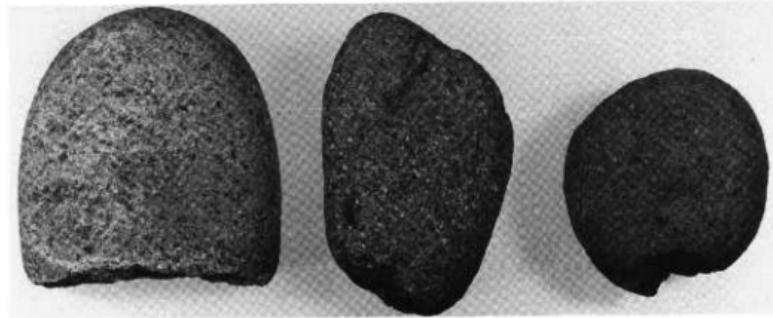
出土土器 6 (土坑)



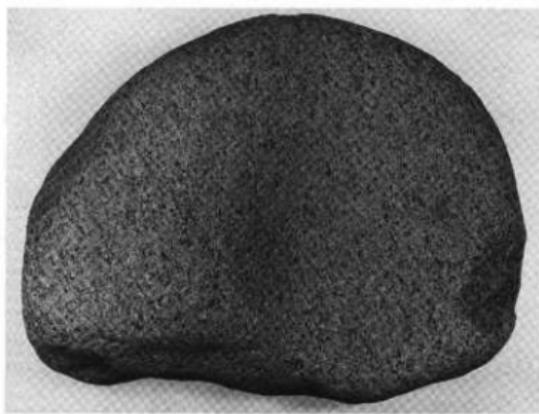
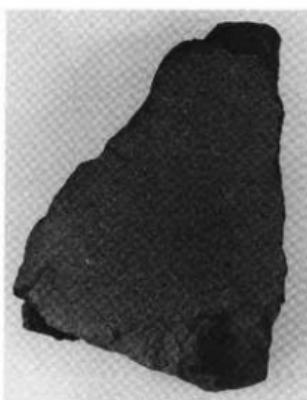
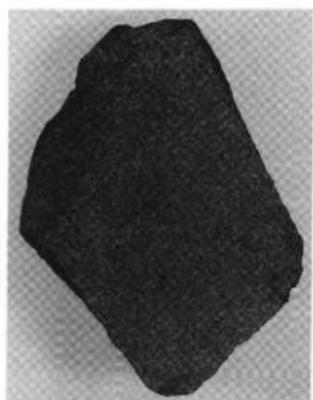
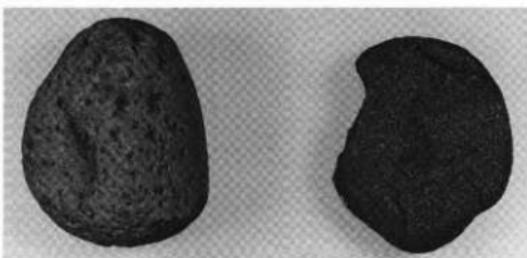
出土石器 1 (1号住居址)



出土石器 2 (1号住居址・土坑)



出土石器 3 (1号住居址)



出土石器 4 (I 号住居址)



出土石器 5 (1号住居址)



調査参加者

## 大垣外遺跡

箕輪町立箕輪東小学校プール建設工事に伴  
う大垣外遺跡の第2次緊急発掘調査報告書

平成5年3月31日 印刷

平成5年3月31日 発行

発行所 長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

印刷所 日本ハイコム株式会社

長野県塩尻市北小野4724